

諸商品集成の感性的直観（その三）

——併せて歴史的端緒説における宮川、向坂兩氏の対立について——

梯 明 秀

I、疎外的実存としての物——II、第三巻における外面的直接性——III、端緒的商品と終極的商品——（以上前々号および前号）——IV、三位一体の信条と本來的端緒——（本号）——V、生産価格とヘーゲル尺度論——（本節以下後号）——VI、世界市場への先験的感性論の適用——VII、市場認識における経験的構想力の破綻。

IV、三位一体の信条と本來的端緒

資本論第一巻第一篇第一章の第一節第二パラグラフ以下の下向的分析の対象としての端緒的商品の世界と、三巻第三篇以来の上向的綜合の叙述において特に第七篇「諸所得とその諸源泉」において展開された終極的商品の世界とは、ともに現実の資本家的富の外面的直接性として、唯一同一の対象であり、したがって亦、それにたいするわれわれの感性的直観における所与内容としても、それ自体として唯一同一であり、この所与内容の規定性の単純さと複雑さとの差異によつて相互に區別されるべきものにすぎない。というふうに前節の論述はみちびかれてきたのであるが、このように見ることは、資本論の学的体系性を、静止した図式として単に知的に理解す

ることを卻け、われわれの現実生活における常識から出発して常識に帰るといふ実践の論理として把握する立場からの、当然の帰結であつたとせねばならない。

すなわち、前節の冒頭に述べておいたことであるが、資本論の生きた体系とは、われわれが日常生活において賃労働者の世界観を獲得するという苦難の往路と、かくして到達しえた世界観を反省的に叙述するという自覚の帰路との、このような実践的生活における円環的な自己運動の理論的表現であつた。言いかえれば、下向的な研究過程と上向的な叙述過程との円環運動の論理そのものである。このような論理的立場にあるかぎりて、社会的総資本の直接的外面性にある現実的な商品世界、すなわち、流通ならびに競争のもとに不断に變動する商品交換の諸関係の総体にたいする直観が、要するに、資本制的市場一般にたいするわれわれの日常生活における感性的直観が、まず最初に問題にならざるをえなかつたのであつた。資本論全三巻を机上において、第一巻の第一節と第三巻の第七篇以下とを讀んで理解しえただけの知識内容を比較するかぎりでは、商品世界の状態が、後者において豊富な雑多性を展開しているに比べて、前者のそれが頗る貧しい単純さにあり、したがって、前者は後者における複雑な諸規定を捨象して単純な規定性に還元しただけのもの、すなわちマルクスの抽象的思惟作用の所産にすぎないものであるかに思えるではあろう。そして、資本論の研究者は普通にこのように考へて済ましているし、しかも、このことは、凡て対象を眼の前に置いて分析する一般科学者の当然とるべき外的反省の立場でもあるが、しかし、ここに既に、資本論の方法論的分析としては看過すべきでない問題が横わっているのである。資本論を生きた体系として把握する今のばあい、第三巻の終極的商品と第一巻の端緒的商品とのマルクスによる規定性の比較だけが問題でなく、資本論の終りと始めとの二つの叙述内容によつて導かれ推定さるべき、唯一同一

の資本制的商品世界にたいするわれわれの現実の日常生活における二つの直観的表象内容の比較が問題であったのである。そして、それらが、唯一の環境的商品市場にたいする同一の感性的直観における、単に空間形式にとどまる所与内容であるか、時間形式との統一のもとにおける所与内容であるかの差異として、前節においてカントの構想力 *Einbildungskraft* の理論によつて理解してきたところであつた。すなわち直観内容としては、終極的商品世界の表象の方が端緒的商品世界の表象よりも抽象的であり、前者に構想力の綜合作用が働いて後者が具体的なものとして形成されたのである。単純なる端緒の商品は、単に外的反省の立場における悟性的分析の抽象の所産ではなく、その抽象的規定性そのものに既にかかる総合的にして具体的な働きを内在せしめていくかぎりでのみ、資本論叙述の総合的演繹の上向の出発点でありうる原理でもありえたのである。しかしながらカントにおいて、直観内容の空間的混沌を時間的に雑多として綜合する構想力の働きは、一つの視角のもとに一つ一つ迫るという手続きの反覆であつた。カントはこの手続きを図式機能 *Schematismus* と呼び、それを範疇の時間化され図式化されたものとした。しかも、この一定の視角とは、この図式としての範疇 *schematisierte Kategorie* であつたのである。とすれば、直観における構想力の綜合作用においては、われわれは既に無自覚ながら悟性の機能を秘ませているのである。これらの事柄についても後節にゆずらねばならないが、今、この点から見れば、終極的商品世界の直観から端緒的商品世界の直観への綜合作用は、同時に前者から後者への分析的な思惟作用を秘ませ、これに限定されていたともいえる。しかしこの思惟作用は、前に指摘した外的反省の抽象的な思惟作用ではなく、直観から自覚さるべき具体的な生きた思惟の働きである。それは、常識から出てゆき常識に帰つてくるところの、生きた現実生活を執拗に貫徹するところの思惟作用であつて、この思惟作用の徹底において一般に学問が、今こ

ここではマルクスによる学的体系すなわち資本論が、成立しているのであつた。かくて、さきの同一直観における二つの表象内容の比較の問題ということも、この生きた思惟の必然性を予想したうえで、それらの動的な関連において解明されねばならないのである。

第一巻の第二節における端緒的商品の表象世界は、直観の綜合作用に結合した悟性の思惟作用としては、終極的商品の表象世界から出発した下向の旅の終極の世界であり、そして、この思惟作用が、帰納的分析であるかぎりのもゝとしては、下向の方法は、具体的なものゝ諸規定を一つ一つ抽象してゆく過程であるほかないからして、この下向的な分析の遍歴の終極において得らるべきは必ずの成果は、終極的商品世界の単純化でなければならぬ。これが第一巻第一節の端緒の商品の現象世界である。ここでまた、単純化の終極であるがゆゑに複雑化の端緒たりうる、ということができる。そして逆に、この複雑化の上向的綜合過程の終極は、そのゆゑに単純化への端緒であつたはずである。とすれば、終極的商品世界の直観と端緒的商品世界の直観とは、同一の下向的な分析的遍歴の旅の第一次の出発点と第二次の出発点とであるかに見える。だが、同一の途の同一方向に二つの出発点があるはずはない。それらが、商品世界としての現実的環境における同一直観内容の複雑性のままであるか、あるいは、それが単純化されたものであるかの差異であること、前述したところである。すなわち、同一の常識の世界に学問的意識の芽生えを未だ秘ませていないか、それとも既に秘ませているかの差異であつた。そのかぎりでは、第一巻第一節の単純化された商品世界の全体表象においても、この表象の対象としては、複雑な諸規定を展開している現実的資本の外面的直接性が、すなわち、第三巻の叙述過程の終極において展開されたままの資本制商品市場一般が、客観的実在として定立されていることに留意されなければならない。言いかえれば、われ

われの感性的直観においては、単純なる資本制的商品世界の雑多な全体表象の背後に、当然マルクスが主張すべきは「資本主義の矛盾」であるように、今一つの複雑な資本制的商品世界の「混沌とした一つの全体」の「表象を前提として絶えず浮べて」おかねばならないのである。そして、かく二重化された表象世界の執れを前面化するにしても、唯一の現実の感性的直観の所与内容であることに変わりはなく、単純なる資本制商品の雑多なる全体を、意識の地平に——形態心理学の用語を借りて表現すれば——図形 *figure* として繰り抜けるとき、複雑なる資本制商品の混沌たる全体表象は、この図形の背後に素地 *field* として漠然とするし、逆に、後者を図形として意識の前面に現出するとき、前者は背後に退いてその背景の素地となり、ここに第三巻の終極的な社会的総資本の外面的直接性の世界が展開される。しかも、さらに執れの全体的表象も、唯一同一の現実的対象の外面的直接性の所与内容として、資本制的市場現象の仮象性たる点においても何らの差別はない。われわれの常識は、「諸商品の集成としての資本家社会」を生活環境にもつかざり、ここにおけるかかるとしての仮象的な感性的実在に直接的なのであつて、実体的資本における真実の階級的な人間関係を無媒介的に直接的な現象として、感性的に受容することは不可能であるからである。

1、第五章「悟性的範疇としての要素的商品」において、下向上向の思维的運動を分析すべく予定している。

2、マルクス『経済学批判』（宇高訳）「序説」、三四七頁および三四九頁。

では、第三巻の終極的商品世界がその外面的直接性において現わす仮象性とは、如何なる状態 *Modus*, *Modalität* であるか。それは言うまでもなく、すでに第一巻第一章の第四節でマルクスが解明した「商品の物神化」の、資本制生産の基礎のうゑに完成された状態である。マルクスは第三巻の全叙述において、実体的資本における生産

諸關係が現実的な資本流通の過程において必然的にとる転化諸形態を究明しつつ、それぞれの転化形態に対応した「商品の物神化」の諸状態を、発展的に追跡してゆき、最後の第七篇、第四十八章「諸所得とその諸源泉」において、その総括的叙述のもとにこの理論を完成しているのであるが、このことは周知に属する。ところで、この「完成された商品物神化」の理論によって、われわれの感性的直観が受容する仮象性そのままの思想が、必然的に何であるべきかについても読者は、ここで知ることができるのであるが、マルクスはこの章の標題として掲げて、この思想を端的に明示している。すなわち、それは「三位一体の信条」 *trinitaire Formel* である。そして述べている。

——「資本——利潤（企業者利得プラス利子）、土地——地代、労働——労賃。

これは社会的生産過程の一切の秘密を包含する三位一体的形態である。さらに利子は、資本の本来的な特徴的な生産物として現象するが、企業者利得は、これに反して資本にかかわりなき労賃として現象するので、かの三位一体的形態は、立ち入ってみれば次の形態に還元される。

資本——利子、土地——地代、労働——労賃。

この形態では、資本制生産様式を独自の特徵づける剰余価値形態たる利潤が幸いに片づけられている。³⁾ さて、この三位一体的形態の直接的反映思想としての信仰個条については、

——「俗流経済学は、ブルジョアの生産關係にとらわれたこの生産の代理者たちの諸表象を教義的に通訳し、

体系化し、弁護する以外には、事實上、何もしない。だから、経済的諸關係の疎外された現象形態、そこでは、この諸關係が一見して馬鹿げたことであり、完全な矛盾であるような、現象形態においてこそ、——もしも事

物の現象形態と本質とが直接的に一致するならば、およそ科学は余計なものであらう——、かかる現象形態においてこそ、俗流経済学がすっかり心安さを感じるとしても、——そして、この諸関係は、その内的諸関連は隠蔽されていても、それが普通の表象になじみがあればあるほど俗流経済学にとり、ますます自明のことと見えるとしても、——それは、われわれにとり不思議とするにたりない。だから俗流経済学は、その出発点たる三位一体が、土地——地代、資本——利子、労働——労賃または労働の価格という三位一体が、一見して、不可能な三つの組み合わせであるということについては、いささかも気づかないのである。³⁾——

資本主義社会の表面における右の三位一体の現象は、俗流経済学者によって教義化され体系化されなくとも、「生産の代理者たちの諸表象」となり「普通の表象になじみのある」ものである。すなわち、われわれの日常生活の感性的直観において誰でもが受容している直接的な全体表象でなければならぬ。複雑なる規定性にある終極的諸商品の個々の諸表象の総合において構想される全体表象が、三位一体の信条を主観的にいだかせるような構造の一つの形象をとっているのである。すなわち、終極的商品世界の感性的直観における全体表象は、また一つの構想力の働きによって総合された成果としてのかかる三位一体的な、商品の世界像を形成しているとしなければならぬ。とすれば、さきに終極的諸商品の集成になる表象世界において、ただ「交換されている有用物」という単純なる規定性を視角として終極的諸商品の一つ一つを区別しつつ同一化していったときに構想される全体表象が、第一巻の第一ないし第二の両節における単純商品の全体表象であり、それが一つの特殊な形象をとるとしてきたのであるが、この形象こそは、初めからまた一つの世界像、すなわち単純商品の世界像と呼ぶべきはずのものであったとせねばならない。それでは、この端緒的な単純商品の世界像は、終極的な商品の世界像と、

世界像として如何に異なるであろうか。同じく資本制商品世界を対象として受容し構想された世界像であつて、後者が複雑なる規定性のままの諸商品をエレメントとするにたいして、前者がその単純化された規定性の諸商品をエレメントとするだけのものとであるにしても、たとえば同じく三位一体の世界像の後者における複雑さの単純化されたものを前者に見る、というようなことはできない。二つの全体表象において複雑さと単純さとの差異を見られうるものは、ただ「商品の物神化」という仮象性である。すなわちマルクスも、このフェチシズムを第一章の第四節において単純なる形態において取りあげたはずである。これをマルクス自身の言葉によつて確めるならば、

——「すでにわれわれは、資本制生産様式の——および商品生産さへもの——もつとも単純なる範疇たる商品および貨幣のところて、一つの神秘的性格を、すなわち社会的諸關係——富の質的諸要素か生産にさいしその担い手として役立つような社会的諸關係——をば、これらの物（商品）そのものの諸屬性に転化し、またさらに判然と生産關係そのものを一つの物（貨幣）に転化するところの神秘的性格を、指摘してきた。あらゆる社会諸形態は、それらが商品生産および貨幣流通を生ぜしめるかぎり、この転倒に關与する。だが、資本制生産様式においては、そして、その支配的範疇をなし、それを規定する生産關係をなすところの資本にあるのは、この魔法にかけられ転倒された世界が、さらに一そう發展するのである。」³⁾——

すなわち、単純商品を生産し流通せしめる資本制以前の社会諸形態においては、この「物神化の魔法」の効果は少いのであり、これと同様に、資本制社会においても、単純商品としての全体表象を構想するかぎりには、この「魔法」の効果は希薄にされているのである。そのかぎりにおいては、三位一体の世界像は構想されえない。こ

それが構想されるためには、單純商品の世界像としての「物神」が完成され、その「魔法」にかけられ転倒された世界」が、われわれの社会環境の全面に拡大され、資本制社会の外面的直接性にまで展開されていなければならぬ。すなわちマルクスは、三位一体の世界像がわれわれに構想されるための客観的条件を挙げて、これが單純商品の世界像と異なる特殊の全体表象であるべきことを示している。

——「この仮象を確立するものは、なかんづく次の二つの事情である。第一に、讓渡利潤なるものは、詐欺、策略、専門知識、熟練、および凡百の市場状況に依存するということ、だが次には、ここでは労働時間のほかに、第二の規定的要素たる流通時間が附け加わるという事情。この流通時間は、価値および剰余価値の形成のために消極的制限として機能するにすぎないか、しかもあたかもそれは労働そのものと同様な積極的原因であるかのような、また、あたかもそれは資本の本性から生じるところの、労働とかかわりのないところの一規定をもちこむかのような、仮象を呈する。われわれは第二巻においては、この流通部面を、その生みだす形態諸規定に關してのみ叙述することに、そこで行われる資本の姿態の進展を指摘することに、当然ながらとどめざるをえなかった。だが現実においては、この流通の部面は、競争の部面、すなわち各個のばあいについて見れば、偶然によって支配されている競争の部面である。かくして、この競争の部面では、これらの偶然において自らを貫徹し且つこれらの偶然を調節するところの内的法則は、これらの偶然が大量的に總括されるばあいにのみ、眼に見えるようになるのであり、かくして、この競争の部面では、この法則は、個々の生産代理者そのものにとつては、依然として眼に見えず理解できないのである。だか、さらに、現実的生產過程は、直接的生產過程と流通過程との統一としては、新たな諸姿容——ここでは、ますます、内的關連の脈絡か消え失せ、

生産諸関係が相互に自立化し、価値諸成分が相互に自立的諸形態において骨化しあうところの、新たな諸姿容——を生みだす。³⁾——

仮象のこの「新たな諸姿容」の総合において構想された一つの形象が、三位一体の商品世界像であり、その直接的な主観的反映そのままの常識としての信仰個条が、俗流経済学的なブルジョア的な世界観である。⁴⁾

3、マルクス『資本論』、第三卷第七篇第四十八章（邦訳、日評版）三九三—四頁。同、三九九—四〇〇頁。同、四一八頁同、四二〇—一頁。

4、このことについて、なおマルクスの言葉の援用を厭わないならば

——「資本——利潤、またはその一層すぐれたところの、資本——利子、土地——地代、労働——労賃、において、価値および富一般の諸成分とその諸源泉との関連としての、この経済学的三位一体において、資本制生産様式の神秘化が、社会的諸関係の物化が、物質的生産諸関係とその歴史的社会的な規定性との直接的癒着が、完成されている。ムシユ—資本とマダム土地とが、社会的諸性格として、また同時に直接的には、単なる諸物として、それらの怪しい振舞をするところの、魔法にかげられた、転倒させられた、逆立ちさせられた世界。この虚偽の仮象および欺瞞、富の相い異なる社会的諸要素相互のこの自立化および骨化、諸物象の人格化と生産的諸関係の物象化、日常生活におけるこの宗教。こうしたものを古典派経済学が分解したということは、その偉大な功績である。……とはいえ、古典派経済学の最も優れた代弁者たちでさえも、ブルジョアの立場から然うあらざるをえないのであるが、——依然として多かれ少かれ、かれらによって批判的に分解された仮象の世界にとらわれており、したがってまた、すべて多かれ少かれ、諸々の前後撞着、中途半端、および未解決の矛盾に陥っているのである。ところが他面、現実の生産代理者たちが、資本——利子、土地——地代、労働——労賃というこれらの疎外された且つ不合理な諸形態において、すっかり気安さを感じているということも、同じく自然である。ただし、これこそは、まさに、かれらがそのなかで運動し且つそれとともに日かゝりあわねばならないところの、その仮象の諸姿容だからである。したがって俗流経済学——これは現実の生産代理者たちの平凡な諸表象の、教師じみた、多かれ少かれ

教義的な、翻譯以外の何ものでもないのであって、これらの諸表象のあいだに或る種の条理ある秩序をもたらすものである。——が、内的関連の一切が消滅しているこの三位一体においてこそ、自己の浅薄な勿体ぶりの、自然的で一切の疑問をこえた基礎を見いだすということも、同じように自然である。この信条は、同時に支配階級の利益にも一致する。けだし、この信条は、支配階級の所得諸源泉の自然必然性と永遠の正当性とを宣言し、かつ一つのドグマに高めるものだからである」。

△『資本論』第三卷第七篇第二十八章、(邦訳、日評版)四二四—二六頁。▽——

したがって、これに反して、このブルジョア的な商品世界像および世界観を成立せしめる右に挙げられた二条件が、すくなくとも先ず初めにかくして捨象され、単純化された単純商品世界の全体表象には、ただ単純化された物神的世界像が構想されるだけであり、これの主観的反映に成立する世界観もただ単純なる物神崇拜である。

そして、かく単純化された世界像ないし世界観のこの物神的性格が、現実^にに具体的な世界像ないし世界観として支配的に現われるのは、資本制以前の単純商品が生産され流通した特殊なる——高利貸資本に関連したかぎりの特殊なる——諸社会においてであって、資本制社会においては、部分的に現れるか抽象的に考えられるかであるにすぎない。そのかぎりでは、第一巻第一章の端緒的商品世界の世界像ないし世界観は、第三巻の終極的商品世界の世界像ないし世界観の具体的現実性にあるにたいして、抽象的実在性にとどまるに相違はないにしても、にもかかわらず、三位一体的性格をもちえないかぎりでは、後者にたいして特殊なものとして対立しているものではない。かくて、さきに、端緒的商品世界の全体表象と終極的商品世界の全体表象とは、同一の感性的直観の所与内容であつても、学問的意識の芽生えが秘んでいるか未だ秘んでいないかの差異が、それらのあいだにあると主張しておいた理由を、ここで見るべきであったと言えらるであらう。なぜならば、当面の資本制社会にたいする科学的な下向的分析過程への現実の出発点としての同一直観の所与内容において、構想力を単純なる規

定性の図式を規則として働かしておくことによって、同じく構想力を複雑なる規定性の図式を規則として働かすばあいには陥る三位一体の信条を、その成立の条件から棄て去ることが出来ているからである。そのかぎりではまた、端緒的商品世界像ないし世界観と、終極的商品世界像ないし世界観とのあいだの関係は、外的反省の立場からの規定性の単複の比較という静的把握を止揚した動的関連としての把握も、ここに成就されたと見ることが出来る。型態心理学の学術語である図形と素地とによって理解されたかぎりでは、この動的関連も、二つの像ないし観の前面化と背景化との交互作用としてのみの相対的把握に、未だとどまっていて、両者のあいだの論理的な評価は、そこにてきていたなかったわけである。

5、マルクスは前掲の第四十八章において次のごとく述べている。

——「従来の社会諸形態においては、この経済学的神秘化は、主としては、貨幣および利子生み資本に関連してのみ生ずる。かかる神秘化は、専断の本性上、次の場合には有るべくもない。というのは、第一には、使用価値のための、すなわち直接的自己需要のための、生産が優勢な場合であり、第二には、古代および中世におけるがごとく、奴隸制または農奴制が社会的生産の広汎な基礎をなす場合であって、この場合には、生産者にたいする生産諸条件の支配は、支配および隷属諸関係——これは、生産過程の直接的発条として現象し、かつ眼に見えるものである——によって隠蔽されている。自然発生的な生産主義が支配的に行はれる原始共同体においては、また古代の都市共同体においてさえも、その諸条件をとものうこの共同体そのものこそが、生産の基礎として現れ、また共同体の再生産が、生産の最終目的として現れる。中世の同職組合においてさえ、資本も労働も無拘束なものとして現れないのであって、それらの諸連環は組合制度により、また、これに関連する諸関係、および、この諸關係に照応する諸表象——職業的職務、割分制などの諸表象——によって規定されている。資本制生産様式において初めて……」(「前掲、同章、四二六—七頁」)

さて以上の予備的吟味を終えて、いよいよ最後に、冒頭文節に使用されている「商品」たる語の意味に吟味の

焦点を移すべきであるが、このことは本節では、さしあたり、本章のテーマが主としてそこに限定されていたはずの、その第一句第一段の命題——「資本家的生産の支配的に行われる諸社会の富は諸商品の集成として現われる」——におけるこの「諸商品」が、第二パラグラフ以下の科学的分析の端緒としての單純なる規定性の諸商品であるか、それとも、第三卷の終極的叙述によってその規定性の複雑にされ具体化された諸商品であるか、このことだけを、問題にすることになる。ところで、この問題は、実はすでに解決されているとせねばならない。けだし第三卷の終極的商品の世界が、資本論の体系の、常識から出発して常識に帰るといふその生きた体系の、現実的な端緒であるべきだといふ上述のわたしの主張そのものが、右の第一段の命題の意味するところを分析的に吟味することにおいて、演繹されえた帰結であつたはずであるからである。したがって、ここで再び論証をくりかえすことを避けるべきではあるが、冒頭文節における商品は、第三篇の終極的叙述によって具体化された複雑なる規定性における終極的商品と、同一であるとせねばならない。すなわち、資本家的富がわれわれの感性的直観に現れる形態としての「諸商品の集成」とは、言うまでもなく「資本制的諸商品の集成」ということでなければならぬのである。

ところで、ここで、この問題にならないことを再び問題にして、よく必要を感じるのは、資本論的方法的研究者のあいだにおいて、冒頭パラグラフの商品を第二パラグラフ以下の單純商品と無差別的に論じ去つて、両者の區別を顧みないか、その區別に気づいていても不問にすごすか、要するに、この區別的方法論的意味に無感覺大のを、むしろ普通のこととして見うけられるからである。このような素朴な方法論的態度において、第二パラグラフ以下の單純商品の規定性を、それを過去の先資本制のものとするか資本制下の現在のものとするかの、これら

の対立的立場の何れにあるにかかわらず、もしも仮りに不用意にも、第二パラグラフ以下の商品の規定性を、冒頭パラグラフの商品にまで無差別的に延長して演繹せしめるとき、この素朴なる方法論的態度の誤謬は端的に露呈される。なぜならば、このばあい、冒頭パラグラフの命題は、「剰余価値の含まれていない諸商品の集成が資本家的富を構成し、かかる個々の単純商品が資本家的富のエレメントである」という不可思議な主張に変質されてしまうことになるからである。⁹⁾この点から見ても、冒頭パラグラフにおける商品は、第二パラグラフ以下の単純商品と厳密に区別されねばならないことの必要を、端的に感得すべきであると思われるが、このような誤謬を無自覚的に孕む右の素朴な無差別的態度は、第二パラグラフ以下の単純商品をもって、過去の先資本制商品を見せしめるか現在の資本制商品を見せしめるかにかかわらず、直接的には、第二パラグラフ以下の端緒的商品の単純化された規定性と第三巻の終極的商品の複雑化された規定性とを、眼前に並べて比較することに専ら注意を奪われていることに拠るのであらうにしても、本質的には、かかる比較に終始する態度自体が外的反省の抽象的悟性の立場であることに、したがって、資本論の体系的な図式に固定するほかないことに、反省しえないことに基くといふべきである。¹⁰⁾資本論の体系を生きた体系として把握するためには、この悟性的思惟をこととする外的反省の立場を止揚せねばならない。さきに述べてきたところの、終極的商品の集成された全体表象あるいは世界像と端緒的商品の集成された全体表象あるいは世界像との、同一感性的直観のうちにおける動的関連の思想は、かかる外的反省の悟性的思惟の所産でありえない。第二パラグラフ以下の単純なる端緒的諸商品の表象は、第三巻の叙述において終極的に複雑化された資本制的規定性の諸商品表象が再びその単純性に還元されたところのものであることは、資本論的方法的研究者が、外的反省の立場に悟性的思惟を抽象的に働かした

にとどまるものとすべきことを、ここに再び注意しておかねばならないのである。

6、櫛田氏も、冒頭文節の第一句を二段に分け、第一ないし第二節の單純商品を先資本制のものとする主張を、第二段までに限定して、さすがに、第一段については資本制商品であることを承認せざるを得なかつた。同氏の『全集』第二卷、一六九——七〇頁を、参照。この点については、本稿第七章「悟性的範疇としての要素的商品」で触れるのを適當とする。

7、宮川、向坂両教授も、かかる外的反省の抽象的悟性の一般的立場に属するというほかないが、ここでは、対立的な両教授のそれぞれの特殊な立場が問題になりうるであらう。宮川実教授は、向坂教授の立場を櫛田民藏氏のそれと同一視した上、「論理と歴史とのつながりは、一つの体系の現実の歴史的発展が、各発展ごとにその先行諸段階を自己のうちに包含するということ、しかし、ヨリ発展した段階に含まれるヨリ未発展の段階は、ここではヨリ発展していて、もとのままのものではないということ、すなわち、それは弁証法的発展をとげるといふことにある」にもかかわらず、櫛田氏ならび向坂教授は、

このことを理解していないと非難する（『資本論研究』第一分冊四三頁）。しかし向坂教授が、この第三節における歴史の論理性を理解しないでいたにしても、宮川教授の方も、第一、二節における論理の歴史性を徹底的に理解していなかつたことは、向坂批判を無効にしているのである。——宮川教授の批判の材料にしたものは向坂教授の前掲誌近作でなくて以前のものであるが、向坂教授自身も、以前からの考へ方の変化のないことを、前掲誌の論文で語っているし、宮川教授の向坂教授から引用句において、同一の主張を続けてきていることを、わたしも確めらるので、前述のわたしの向坂批判と係はらしめて、ここに宮川教授に寸評を加えておきたい。——たとえば、宮川教授は次のごとく言っている。「歴史的発展の初めにあつた商品や価値は、まだ萌芽的な未発展なものであつて、論理的発展の初めにある商品や価値のような成熟した十分発展した概念に一致したものではない」（宮二思と。ここに「論理的発展の初め」とは、第一、二節の單純化された商品であるほかにかぎり、教授は、單純化された規定性の商品と、この單純化された規定性において現にわれわれに現はれている資本制商品とは區別、すなわち、抽象的な規定性と、その複雑化された実体との區別を、理解していないことを自ら暴露している。したがつて單純なものから複雑なものへの認識論的な論理の進行を、歴史の論理におけるかかる進行との區別において

理解していないというほかはない。なぜなら、複雑なものにおける「単純な範疇が、過去の未発展な全体の支配的關係を表現する」という論理の歴史性を、もしも教授が徹底的に理解しているとすれば向坂教授が自らの、歴史主義において唯一の論拠としている当にこの同一の正しい一面の論理を、——すなわち向坂教授は、「最も単純なものから複雑なものに上向する抽象的思惟の法則が、現実の歴史的過程に適應する」というマルクスの公式に拠って、歴史主義を強調しているのであるが——を批難することはありえないからである。また、このことは同時に、宮川教授が、河上博士のごとくには論理主義的に徹底せずして立つているだけの、一つの歴史主義であることをいみしないであらうか。

歴史と論理との関連は資本論の叙述においては二重に理解されねばならない。これは歴史ということが、単に過去から現在への時間的過程だけのものではなく、逆に現在が過去を孕んで新たな將來を創造する主体的活動でも、同時になければならぬことに由來する。——このことについては、わたしは『資本論の弁証法的根拠』所収「資本論の弁証法、ならびに『資本論の学問的構造』所収「現実的な学としての資本論」で注意しておいた。——だが、いまここで端緒的商品にかかわるかぎりでは、わたしの右の所説におけるマルクスの本來的論理形態は、変形して、現在から過去へのこの主体的反省といふことも、疎外された形態として、外的反省による現在の現象から本質への下向的分析といふ第一、二節の認識論的進行として現はれ、これが、過去から現在への時間的過程に添うた上向的綜合としての第三節の歴史的叙述に對立するものとして現れている。このように変形した論理形態の上で、第一、二節における認識論的端緒の抽象性が過去の単純規定に妥當するという歴史性は、第三節の歴史的過程の論理性と、同一内容であるといふことができる。すなわち、區別における同一性といういみにおいてである。

宮川教授の理解する歴史の論理性は、次の言葉で何うことができる。——「歴史的發展と論理的發展とは直接に同一ではない。第一に、現実の歴史には、偶然的攪亂的要素が入り、その發展はデグザクである。そのため、商品生産の歴史的發展から、商品生産に根拠をもたない外來的事情による影響という偶然的なものを除かなければ、歴史的發展は論理的發展と照応しない」——教授のこの第一次の限定においては、歴史の論理性は、「具体的なものを占有するための思惟の様式」としての「抽象的なものから具体的なものへ上向する方法」（マルクス『経批』）であって、「現実的な歴史的過程に照応し

た」かぎりの「抽象的思惟の法則」(マルクス『経批』)以外のものではありえない。すなわち、この論理の歴史性がそのまま歴史の論理性なのである。すなわち河上博士も言う。「単純な範疇が未発展な全体を表現しているとかぎりにおいては、抽象的思惟の法則は、現実的な歴史的過程に適應する。それは恰も、複雑な組織にまで発展している動物の卵細胞が、細胞動物という未発展な全体を表現しているとかぎりにおいては、動物進化の出发点において、その独立の歴史的または自然的存在を保っていると言い得られるのと同じである」(『資本論入門』九九頁)と。認識論的な抽象的思惟の法則と、偶然性を捨象した歴史の論理性との差異をここに求めれば、前者が無時間的發展であるにたいして、後者が時間的發展であるにとどまり、内容的には同一でなければならない。今この無時間的な抽象的思惟の發展を生物学における個体發生に譬えれば、歴史の論理性としての時間的發展は系統發生にあたり、個体發生は系統發生を繰り返すというヘッケルの意味での一致が、ここに見られるわけである。しかし道に、河上博士の言うごとく「個体發生が系統發生の縮図でありながら、系統發生そのものでない」(同じく九九頁)という区別が、そこに認識されなければならない。したがって宮川教授も、前の引用句に続いて「第二に、たとえ歴史的發展から偶然的なものを除いても、歴史的發展と論理的發展とは、決して同一ではない」(前掲、第一分冊、三四頁)と言う。

しかし、その論拠とするところのものは、「要するに、たとえヨリ単純な範疇は歴史的にはヨリ具体的なものに先だつて存在し得たとしても、その内包的および外延的の完全な發展においては、それは、ただ複雑な社会諸形態のみに属しうるのである」(『経批』)というマルクスの言葉である。

ところで、このマルクスの言葉こそは、単純な範疇から複雑な諸規定への商品自体の論理的發展であつて、偶然性を捨象した歴史の論理も、これ以外にははずである。したがつて、教授が必要とする第二次の限定は不必要であり、不必要なものも必要とするかぎりでは、第一次の限定における歴史の論理性をば、弁証法的發展でないところの何か無發展な時間的推移でも考へているのである。これは誤つている。しかし、「それゆえ、論理的發展は、歴史的發展から偶然性を取り除き、さらに、それぞれの發展段階を、その完全な發展点、その完全な成熟性において、すなわち概念に一致した形態において、觀察した歴史的發展と、一致するのである」(前掲第一分冊、三四頁)と正当な主張をしているかぎりでは、歴史におけ

る偶然性ということの論理的把握に、したがって、エンゲルスの『マルクス経済学批判について』における言葉（同右、三頁の註一八を参照）の理解に、不十分なるものが秘んでいるとせねばなるまい。

とにかく教授が、歴史の論理性として扱っているものは、「次々に規定されてゆく各段階ごとに、その先行の全内容の全量を引き上げ、その弁証法的前進を通じて、単に、何ものも喪はず且つ自己の背後に残さないだけでなく、獲得された一切のものを自己のうちに包含し、豊富化し、濃密化する」というヘーゲルの過程的弁証法に基づいてマルクスの言葉を理解したものである。かくて、次のごとく主張することは全く正当である。「論理的発展が歴史的発展に照応するのは、商品生産そのものの発展が弁証法的に行はれ、その最高発展段階である資本制社会の経済的構造が、先行諸段階を自己のうちに基礎として取り入れ、自己のうちに弁証法的にそれらを編成しているからである」（三三頁）。

この正しい主張は、しかしながら、教授自身、ヘーゲルの過程的弁証法によって理解しているとおり、歴史的なものと論理的なものとの関連を、主体と客体、場所と過程のマルクスの弁証法で把握していないことの証佐でもある。別著『経済学入門』「第三講」において、資本論第三節を単に歴史的叙述としてのみ解説してあるが、これは資本論における歴史性の位置づけとしては正しいが歴史の論理性を不問にしている点で誤解を誘うものである。かくて、論理とは歴史から偶然的覺亂の要素を捨象しただけのもののみであって、主体の認識論的、或いは実践的な反省論理にたいする無理解を露呈せざるを得なかった。

論理と歴史との同一性は、区別における同一性としてのみ弁証法的なのであって、論理に偶然性を外から加えて現実の歴史が成立するというような直接的同一性ではない。主体的な論理の歴史性と、客体的な歴史の論理性とが現実の内容として一致すると同時に、同一の歴史のロゴスの主体性と客体的性が、自由と必然として、あるいは擧亂的偶然と因果的法則として、区別されるのである。単純なものから複雑なものへの弁証法的発展ということも、単に因果的必然だけでは不可能なのであって、この因果的必然が同時に目的論的な綜合原理の自己実現であるかぎりでのみ、可能なのである。これが第三節におけるマルクスの方法論であった。凡て歴史を単に客体的過程としてのみ一面的に捉えることは、悟性的な客観主義の偏同であって、その理論的態度は公式主義であることを免れない。宮川教授は、「単純なものから複雑なものへの」の實在的であ

ると同時に思惟的である弁証法を単に一方的に歴史的発展としてのみ捉え、この歴史的発展を、直接的に反映して、その映像を自分の方法論としているが、これは教授自身の引用（同右三五頁註一八）するエンゲルスの次の有名な言葉の理解に不十分な証佐であらう。

——「論理的な取り扱いは、実際ただ歴史的な形態と攪乱する偶然性とを取り去った歴史的な取り扱ひ方に外ならない。この歴史の始まるところで、思惟の進行も始まらねばならぬ。そして、そのより以上の進行は、歴史的経過の、抽象的な且つ論理的に首尾一貫した形態における映像にほかならない。とは言うものの、それは、おのおのの契機が、その完全な成熟の、その古典性の、發展点において観察されうることにより、現実の歴史的経過そのものが示す諸法則にしたがって、修正された映像にほかならない。」（『マルクス経済学批判について』）——

この言葉の最後の句は、現実の歴史の科学的分析によって獲得された法則を媒介して修正された映像を、歴史の論理性としていることの注意である。すなわち、それは、実現の歴史の一方の契機にすぎないところの客体的過程——場所としての主体が歴史的現実ということの他方の契機であるが——の無媒介な模写ではなしに、認識主観の科学的分析という悟性的思惟を媒介にしたその実践的模写である。この外的反省だけでは真実の主体的反省とはいえないが、かく模写された映像が、宮川教授の生きな方法論として教授の全労作に一貫するためには、教授もまた「何故に、われわれは単純なものから初めねばならないのか」という始元の問題を哲学せねばならないのである。「単純なものから複雑なものへ」の論理形式を映像としてもつに止まるかぎりでは、この方法も、単に公式的な知識であるにすぎず、認識されて教授自身の実力となっているとは、言えないであらう。

教授自身も「論理と歴史とは、二つの異つたものであるが、資本制的生産様式そのものの現実的發展において統一されている」と主張するが、この主張のもとに、向坂教授にたいする無意味な批難をしているのである。相互に異なる立場を突きつけることが、そのまま批判にはならないはずで、対立した関係における同一性が何であるかの明示によってのみ、却って批判が生きてくるのである。商品の端緒を歴史的に把握せんとすることに於いて一致しながら、両教授が相互に反撥しているのは、両教授の歴史主義の論拠を異にしているからである。両教授の歴史主義の対立は、第一、二節の立場における単

純商品を論拠とするか、第三節の立場における単純商品を論拠とするかの差異に基くかぎりのものである以上は、両教授が立場の対立を克服するために相互に自覚すべき同一性は、冒頭文節の端緒的商品においてこそ求められるべきであろう。この冒頭文節の本來的端緒においては、直接性と媒介性との二重性としての二つの単純商品が統一されていることを、そして、これこそが「資本制生産様式そのものの現実的歴史的発展における統一」であることを、ここに再び強くわたしは主張してかねばならないのである。

以上は、要するに、わたしの立場を両教授から区別するための批判であったが、区別するに急であって両教授から教示されるべき諸点を深く味うことの缺けたことは、非礼のほかはないだけでなく、区別における同一性を認識するに不徹底なものとして、或は批判に成っていないかも知れない。歴史と論理との関連の問題は、もともと本論稿において後章「資本の結果としての現実的商品と実践的直観の立場」のところで予定してあるもので、この問題についてのわたしの理解を積極的に展開したのちに、註記すべきものとすべきであるが、ここに事前に不適當な個所での註記として提唱したものととして、一面的批判にとどまったであろうことは、十分に自覚している。

なお梶田民藏氏の歴史主義については、その論証の方法の誤謬にかかわらず、氏の意図するところが何であったかを、徹底的に検討して見る予定である。あたかも本章が、河上博士の認識論としての論理主義を、しかも、それが臨るほかなかつた博士の経歴主義を、徹底せしめて、そこに撞着する困難と限界とを明示することを、目的としているものであると同様に。

たとえば既に述べてきたごとく、直観的な全体表象はカントによってさえも、単純化された規定性としては、構想力の綜合作用によって具体化されたかぎりの成果でなければならなかった。すなわち、第三巻に複雑化されている「資本制諸商品の集成」としての実在にたいするわれわれの感性的直観の所与内容は、まず最初に空間的直観形式のみによって受容された状態としては「混沌たる一つの全体の表象」であるにすぎないが、そこに資本制的規定性の雑多がかかる雑多において受容されているためには、他の直観形式としての時間性において構想

力が能動的に働いていなければならなかった。そして、この総合の手續きにおいて「図式化された悟性概念」——ヘーゲル的には規準 *Maßstab*——としての視角が、この働きそのものの規則 *Regel* になるわけであるが、「価格をもつ有用物ないし生産物」という単純な規定性とどまらばあいに構成される物神的世界像が、第二パラグラフ以下の端的商品世界であり、このような商品世界像としてのみ資本制以前に実在した単純商品の世界にも妥当するのであつた。これに反して、右の構想力の綜合作用の視角が資本制的規定性の複雑さのままのものであるときには、第三巻の終極的叙述にある三位一体的商品世界像が構想され、われわれの日常の常識の世界において感性的に直観するところの内容となる。このいみで、——すなわち、単純なる規定性を規則として綜合を働かす構想力のこの方向の働きそのものは、三位一体的信条のもとにおける他の方向の働きと異なるものとして、俗流経済学的世界像を否定する働きでもあるといういみで、——そこに科学的意識の芽生えを秘めていたわけであるが、この芽生えとは「図式化された悟性概念」であり、外的反省の立場における悟性概念の抽象化する分析能力にたいして、具体化する綜合能力であることに注意する必要がある。すなわち、右の二つの全体表象あるいは世界觀の動的関連は、常識から出発して常識に帰るといふ生きた学問的思惟の芽生えをいみするものであつた。と言つたにしても、しかし、単純なる規定性の全体表象そのものに、すなわち物神的性格にとどまつていただけの世界像ないし世界觀そのものに、学問的意識が秘むということには、このことが直ちになるわけのものでないこと断るまでもない。ただ右の動的関連そのものに、三位一体的信条を規準とすることを斥けて、悟性概念を自らの綜合的集成の規則として敢えて扱ばんとするところ構想力の働きが、秘むというだけである。

8、本來的に分析的機能でしかないはずのこの悟性概念が、如何にして綜合的機能を發揮しうるにいたるかについては、最終

節「市場認識における経験的構想力の破綻」を待たれたし。

9、この「空想から科学へ」という合理主義的撰択をする構想力の外的反省の立場が、フォイエルバッハの哲学を根源的に規定している。フォイエルバッハをカントと比較して分析することは、方法的に重要であるが、ここでは、右の点だけを読者の参考のために指摘しておくにとどめる。

この動的関連が、かくのごとき同一直観内容の複雑なる規定性の全体表象から単純なる規定性の全体表象への運動にすぎないかぎりでは、第一巻第一章第一節第二パラグラフ以下の単純商品の全体表象の対応する實在的対象が、依然として複雑な規定性における資本家的諸商品の世界であることに、問題はないはずである。にもかかわらず、その単純なる規定性のゆえに、しかも、この単純なる規定性が過去に實在した単純なる個々の商品にたいして、その未展開の形態で妥当しようということのゆえに、第二パラグラフ以下の単純商品の表象に対応する實在的対象を過去の先資本制的諸商品とするに到っては、かかる認識論的事柄をまったく無視した謬論というほかはない。かくて、ここに結論されることは、第三巻の終極的叙述における複雑な規定性における商品は勿論であるが、第一巻第一章第一節の冒頭パラグラフの、叙述における商品も、ならびに第一節の第二パラグラフ以下の下向的分析の端緒としての単純商品も、ともに社会的総資本の唯一同一の現実的外面性としての商品世界を實在的な対象として前提しており、しかも、この三者の孰れも、この同一實在対象に直接して受容した同一直観内容であるということ、これである。

したがって、この結論において、特に自覚しておくべきことは、「資本家的富として集成されている諸商品」の世界についてわれわれの念頭に描くべき全体表象は、第一節第二パラグラフ以下の単純商品のみを集成になる

世界像ではなく、ここで科学的分析の材料として便宜的に任意に取り出された普通の商品のほかに、労働力、資本としての貨幣商品、銀行券、土地、等々をも、そこに集成さるべき個々の商品として表象ねばならないところの世界像であるということであった。これらの特殊なる諸商品は、資本の結果あるいは生産物としての諸商品であり、現に今ここに手に触れ眼でみられている現実の複雑なる規定性にある資本制諸商品であって、かかる資本制諸商品の対象的实在の世界が、われわれの感性的直観に「諸商品集成」という全体表象として受容されるということ、第一句第一段の命題は叙述しているのである。要するに、マルクスは、資本論第三巻の叙述の終極において到達した結論を、かくのごとく第一巻の冒頭に要約的に提示して第一段の命題としてしているのである。けだし資本論の生きた体系の出発点は、日常生活における感性的直観でなければならぬからである。すなわちマルクスは、かれのかかる学的体系性による方法的要請のもとに、結論を端緒に提示したのであり、到着点を出発点に円環的に結びつけたのである。したがって、資本論の冒頭文節第一段の「諸商品集成」においては、われわれは三位一体的性格の世界像ないし世界観を念頭に浮べても差しつかえないし、否、第二段の命題に移行せざるかぎりにおいては、この直観的所与としての全体表象は、三位一体的信条のもとに構想された「諸商品集成」の世界像でしかありえないのである。したがってまた、冒頭文節第一段命題における商品は、単に冒頭文節に初めて掲げられているというだけでなく、常識から出発して常識に帰るといふ生きた体系のための認識論的意味において、現実的の端緒的商品でなければならぬのである。そして、このことは、——すなわち資本制社会全体を認識するための出発点が「資本制諸商品の集成」としての感性的直観でなければならぬといふことは、——賃労働者階級にとっても同様である。

賃労働者といえども、かれらの日常生活は三位一体の信条に支配され制約されたブルジョアの常識にあるほかない。眼前の資本制諸商品の集積が、自分たちの支出した労働力の対象化でありながら、資本家階級の所有として対立していることの体験において、かかる常識を超えた自己疎外の認識を獲得するに到ったばあい、眼前の資本制諸商品の諸集積の総体が資本家階級の富として自分たちの労働力の吸血鬼として、敵対的に迫ってくることを感性的に直観する。しかもなお資本家社会において現実の生活を営むほかないかぎりて、賃労働者は、「資本制的諸商品の集成」にたいして、そのブルジョアの常識のうちに批判と抗議との衝動を体験せざるをえない。すなわち、かかる自覚的な賃労働者の日常の感性的直観内容は、この「資本制的諸商品集成」の肯定における否定であり、この自己矛盾¹⁰⁾の直接性であろう。賃労働者の直接的に体験するこの自己矛盾を自ら解決せんとするところに、かれらの必然的な思惟活動が初まるほかないとすれば、冒頭文節第一段の命題における資本制的「諸商品の集成」こそは、それ自体が生きた体系の出発点たるべきものとしては、その単なる外面的仮象としてのブルジョアの常識として、単なる外からの端緒にとどまるべきではなく、実は、そこから學問的思惟が出發せざるをえないという必然性を孕む賃労働者階級の自己矛盾的な感性的直観内容として、本来的なる真実の端緒——外からの端緒を内に止揚せんとするところの実体的労働の自己運動の端緒——でなければならぬのである。

10、この感性的直観の同一所与内容における自己矛盾、すなわち自己矛盾的直観の論理構造については、最終章即資本の結果としての現実的商品と実践的直観の立場」において解明される。たほ、これが解明のための思想は、拙著『資本論の學問的構造』所取第一篇第五節「資本論における哲学と科学との一致」において萌芽的に、さらに序章にあたるべき「資本論の學問体系性」（本誌第一巻第六号）において明確に、すでに展開されてきたものである。

賃労働者階級を含めて、さらに資本家階級をも含めての「我々」は、現実の感性的直観の所与内容として、資本制的「諸商品の集成」なる全体表象を、外から受容している。これが冒頭文節第一句第一段の命題の現実的な意味であった。このマルクスの「諸商品集成」の外的把握は、レーニンの言表によって言えば「幾十億回と繰り返えされる集団的な交換現象」の全体表象である。

そのかぎりで、三位一体の信条を世界観とするブルジョアの常識の世界でもある。ところで賃労働者としては、このブルジョアの常識において自己矛盾を直接に体験せるものとして、資本制的「諸商品集成」を、カントの感性的直観におけるがごとく単に自己肯定的にそのまま受容することは不可能であって、これを自己否定的にしか受容するほかないこと、前述のとおりであるが、この感性的直観における自己矛盾を解決せんとして、さらにかかる現実的出発点から資本制社会の認識を始めるべき賃労働者階級の学問的意識を、マルクスは自らに引きつけて進んで徹底せしめたところに、却ってかれの downward 研究過程の苦難の旅があったのである。しかも、この分析的な悟性的思惟の徹底において結晶せしめた思想的成果が、第二段の命題であり、そして、この研究過程そのものの圧縮された叙述が、第二パラグラフ以下の第一節ないし第二節全体における外的反省の立場における下向的分析であった。ところで、「諸商品集成」の「個々の商品は資本家的富の要素的形態として現われる」というこの第二段の命題において、その主語としての「個々の商品」が、「個々の資本制的商品」であることに問題はないとしても、すなわち「要素的形態として現れた商品」自体が、同じく資本制的商品たるに変わりはないにしても、しかし、その「現れた形態」そのものは、「要素的」なものとして、實質的にして量的規定性を容れうる。がごとき性格の形態でなければならぬ。すなわち、資本制的に複雑化された特殊な規定性の一つ一つには無関

心な、それらの捨象された、単純な規定性の形態でなければならぬ。要するに、「価格をもつ有用物」としての規定性さえあれば、第二段の述語の意味は十分なのである。かくして、この第二段命題に結晶された思想は、レーニンの言表に委えてみるまでもないが、「資本主義的生産においてのみ、生産物の商品形態は、例外的でなく孤立的でなく偶然的でなくして、一般的なものとなっている」ことを、われわれ読者に宣明しているのである。資本論を生きた体系として把握するわれわれにとっては、第一ないし第二の両節に向うばあい、現実の感性的直観内容として直接的に受容された資本制的「諸商品集成」なる全体表象において、われわれの構想力が自らの綜合作用のための視角あるいは規則として、「交換価値の担い手としての使用価値」なる単純なる悟性的範疇を、現実には、撰択して、能動的に働かしているのであるが、このばあい、この撰択が何故に科学的であり、したがって三位一体的な俗流経済学的常識を如何にして卻けうることになるか、ということの反省を予めわれわれが意識的に試みることもなくして、われわれの感性的直観において盲目的な構想力が現実にかかる撰択をなしたものと、直接的に自ら了解し、もって安んじてマルクスの叙述を辿って読みすすみ行くことのできるものは、何故であらうか。それは実は、冒頭文節、第二段の命題を読了してきたわれわれとして、ここに宣明されたマルクスの苦難の結晶的思想が、念題に浮べられて、この盲目的構想力に光を投じていると信頼しうるからだとせねばならない。このようにして、われわれ読者が第一ないし第二の両節を読み初めるときに、われわれ読者の念頭に構想しておくべき単純商品世界の全体表象は、すでに冒頭文節第二段の命題で準備されていたことを知るべきであろう。そして、このことは、冒頭文節そのものにおける三段論法的叙述の飛躍のない途づけから、極めて自然なものととして、われわれは論理的に受けとれているはずである。すなわち、第二段命題は、第一段命題を大前提とす

る。小前提として、帰結としての第三段の「だから、われわれの研究は商品の分析から始まる」という命題を、導きだしているのである。

ところで、この第二段命題における「商品」は、その対象的實在としては、第三巻の叙述によれば、流通と競争との不断に變動する商品交換の諸関係の總体であり、冒頭文節第一段の命題によれば、これら資本制的「諸商品の集成」であつて、要するに、現実的な資本制的市場という現実的な商品世界から撰びだされうべき如何なる商品でも差し支へはないのであるが、しかし、ここに任意に撰びだされた資本制諸商品も、それらが分析的研究の端緒としての論理的位置づけをもつかぎりでは、第二段命題の「要素的形態」の規定性にある單純商品の表象でなければならぬのである。第二段命題は、このように第一段命題における資本制「諸商品集成」の個々の商品にたいして、端緒としての論理的意義を附与する命題として、三段論法の形式的意味においてでなく、内容的に重要な意味をもっている。言いかえれば、第一段命題が、単に「資本家の富の直接的外面性が諸商品集成として感性的に直観される」という事実の現実性を叙述しただけのものから、そのことによって、この感性的直観内容が現実的に真実の本来的端緒になりうることの可能性と必然性とを、第一段命題そのものに第二段命題は附与しているのである。すなわち第二段命題は、第一段命題が、そのままでは単に外面的端緒の提起にすぎないにかかわらず、この提起も向自的には真実の端緒であることを潜在せしめていることを、換言すれば、論理的には本来的な端緒的商品の提起でもあるべきことを、基礎づけているものであるとせねばならない。要するに、第一段命題の直接態に即自的に含まれていたものが向自的に顕現して第二段命題となつたのであるからして、第二段命題は第一段命題のために、端緒が同時に原理であるべきことの論証の役割を自らに引きうけているものとせねば

ならない。さきに、冒頭文節における商品を、第二パラグラフ以下の端緒としての単純商品から區別して、本来的に端緒的な商品と呼んでおいたのも、ここにおけると同一の理由によつてであつた。すなわち、第一ないし第二兩節の單純商品は、外的反省の立場から科学的に分析するさいにその現象形態から実体的關係にまで下向するための端緒であり、これにたいして、冒頭文節の第二段命題は、この下向過程を完成したのちに成立した思想である。個々の商品に人間労働力が本質的実体として内在しているという自己疎外を自覚した主体的思想においては、「個々の商品は資本家の富の要素的形態である」と主張しうるのである。すなわち、この第二段命題には、すでに資本論全卷の上向的叙述の端緒としての実体的原理を秘められている。この内からの出発点を、外からの出発点としての第一段命題の感性的直観に結びつけているところに、第二段命題は小前提として、大前提から帰結へと推論せしめ、端緒は同時に原理であるという体系的意味をこの推論によつて突現せしめているのである。¹²⁾

11、第二段命題と第二パラグラフ以下第一節および第二節の叙述との関連については、第六章「悟性的範疇としての要素的商品」において詳しく論述すべきである。なお、第一ないし第二兩節の外的反省の立場については、拙著『資本論の学問的構造』所収「現実的な学としての資本論」を参照。

12、冒頭文節全体の叙述の解明は、本章「諸商品集束の感性的直観」と、第六章「悟性的範疇としての要素的商品」との対立を、統一的に止揚するための論述としての第七章「本來的端緒的商品における直接性と媒介性」において、具体的に展開さるべく計画している。したがって、ここでは誤解を防ぐためだけの要約的意図の簡略な叙述で満足しておいた。

しかしながら、冒頭文節のこの三段論法の体系的意味の分析は、本章の直接的目的ではない。われわれは本章において、さしあたり当面してはたはずの問題、すなわち第一句第一段の命題のみの吟味に、立ち帰らねばならない。